吉備津采女の死にし時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首　并せて短歌

二一七番

秋山の　したへる妹　なよ竹の　とをよる児らは
いかさまに　思ひ居れか　たく縄の　長き命を
露こそば　朝に置きて　夕には　消ゆといへ
霧こそば　夕に立ちて　朝には失すといへ
梓弓　音聞く我も　おほに見し　こと悔やしき
を　しきたへの　手枕まきて　剣大刀　身に副へ
寝けむ　若草の　その夫の子は　さぶしみか　思
ひて寝らむ　悔やしみか　思ひ恋ふらむ　時なら
ず　過ぎにし児らが　朝露のごと　夕霧のごと